

だったらどうしたかな、と考えていた。

強い風が吹いた。それは、この砂漠、および世界中で死んだ人々を空に送るような風であった。

「で、マース。お前は世界を支配できるのか？ その『スイッチ』が偽物である限り、バレたらお前だってタダじゃ済まない」

「皮肉にも『あいつ』の実績のおかげで人々は『スイッチ』を本物だと思い込んでいる。仮にあの将校がバラしたところで、信じる人は少ないよ。それでも疑う人がいれば、じゃあ試しに押してみようか？ って言えば手出しはできないはずさ」

「悪賢いな……そんな上手いくいかな」

「大丈夫だよ。それにいざといういざってときには――」

マースはラジオの方を向き、笑いながら言った。

「君がいるからね」

「……」

ラジオは、再び思考を巡らせる。

――あの人は、なぜ『オレ』を喋れるようにしたんだろう。歩けるようにしたんだろう。考えられるようにしたんだろう。そんな機能、あの人の計画には邪魔だろうに――

それは、この冒険……いや、ラジオが作られたときから抱いていた疑問であった。

しかし、いとも簡単に、ラジオは結論を出してしまった。

――ああ、なんだ。そういうことか。最後の最後に残したあの人の、

孤独な息子に対する愛情か――

ラジオは笑って、世界最悪の科学者の息子であり、自分の兄であるマースに、言葉を返した。

「やだよ。オレ、死にたくないもん」